彌五右衞門直方がありがたき尊諭なりとて、人にかたりし所なり、又常に年若き小姓御伽の衆などに、御みづから經書の句讀をさづけ玉ふ、永上美濃守興正なども、其頃御教をうけし人なりき、また諸番士當直の時、おのがつぼね〳〵にて、書籍を見る事、心のまゝなるべしと、みゆるしありしとぞ、

〔淡明院殿御實紀附錄一〕同じ御物學びの中にも、御讀書は、有德院殿（吉宗○德川）わけて沙汰せさせ玉ひける、國家を治め、萬民の父母となり玉ふ御身にしては、聖人經國の要道、和漢治亂の事實にくらくてはなりがたしとて、日々のごとく儒臣をめして、經書はさらなり、和漢の典籍を進講せしめられしが、成島道筑信遍（同朋格）は、はじめより御側をはなれず、伺候せしめられ、聖賢の嘉言善行よりして、和漢古今の治亂興廢を、話のごとく申奉り、御伽の樣に侍らせらる、そのうへ、凡幼稚の者を敎育せんには、つねに近侍に候ふものをよくをしへ、自然に薰染せむ樣こそあらまほしけれとて、御伽の稚子等、みな道筑の弟子となされ、いとまの日ごとに、道筑その宅にまはりて、敎育することゝなりぬ、水野出羽守忠友（後老）、稲葉越前守正明、横田筑後守準松（後側）御など、みな此ときの御伽衆なり、されば、公（家○德川治）にも、有德院殿の御深慮をよくうけ得させ玉ひ、何ごとも御敎導に去たがひたまひ、かりそめのことにも、御詞にたがひ玉はんことを恐れたまひ、わけて學問に御心を用ひさせられ、御年たけさせ玉ひても、前後漢書三國志などのことは、くはしく諳記したまひ、時々近習の人々に御物語ありしといへり、

〔天保集成絲綸錄八十〕寛政十二申年三月

大目付江

學問之儀ハ、御代々御世話被遊、就中元祿享保之間、厚御引立被遊候、今度於學問所御敎育有之儀に候條、人々相勵候樣可致候、尤文武之道一致之事に候間、武藝之儀も彌無怠可心掛儀、勿論之事